

*The Journal of
Nagasaki University of Foreign Studies
No.23 2019*

英語教師のための基本文献案内(7)

加 島 巧・川 島 浩 勝・藤 内 則 光
原 田 依 子・藤 原 和 政・中 邨 早 希

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (7)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu
FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko
FUJIWARA Kazumasa, NAKAMURA Saki

長崎外大論叢

第23号
(別冊)

長崎外国語大学
2019年12月

【書評】

英語教師のための基本文献案内 (7)

加島 巧・川島 浩勝・藤内 則光
原田 依子・藤原 和政・中邨 早希

The Selected Bibliographical Guide for Teachers of English (7)

KASHIMA Takumi, KAWASHIMA Hirokatsu

FUJIUCHI Norimitsu, HARADA Yoriko

FUJIWARA Kazumasa, NAKAMURA Saki

Abstract

In what follows we offer the seventh bibliographical guide of six basic books for teachers of English. The first book is selected from History of English Studies. The second one is selected from the field of pedagogy. The third and fourth ones are chosen from English language and linguistics. The fifth one belongs to the psychology dealing with peer learning. And the last one belongs to the field of translation whose sources come from English and American Literature.

1. 『諳厄利亜興学小筈』・『諳厄利亜語林大成』（長崎原本影印）…………… KASHIMA Takumi
2. 『現場発！人間的な英語の授業を求めて』…………… KAWASHIMA Hirokatsu
3. 『現代英語文法 大学編』…………… FUJIUCHI Norimitsu
4. 『機能・視点から考える英語のからくり』…………… HARADA Yoriko
5. 『ピア・ラーニング—学びあいの心理学—』…………… FUJIWARA Kazumasa
6. 『翻訳問答 英語と日本語行ったり来たり』…………… NAKAMURA Saki

序

将来英語教師を目指す学生や、英語教師にとって有益な書物を一点ずつ紹介する基本文献案内も7回目を迎えることとなった。まず、英学史の分野から、次に、英語教育、3冊目と4冊目は言語学・英語学の領域からの紹介となる。5冊目は、心理学の領域から選んだ。そして、6冊目は翻訳論だが、翻訳の対象として扱われるテキストは、英米文学から選ばれている。

1. 『諳厄利亜興学小筈』・『諳厄利亜語林大成』（長崎原本影印）

大修館書店 1982年 日本英学史学会編

【本書成立前後の状況】

江戸時代、長崎は「遊学の町」であった。日本各地から学問を学ぶために、人々は長崎にやって来た。江戸後期、医学を学ぶ人たちは、漢方から西洋医学への転換を経験する。また、長崎は蘭学から英学への転換を経験した町でもある。英語学習のきっかけは、文化五年（1808年）に長崎港で起こったフェートン号事件である。オランダ商館長はヘンドリック・ドウフであった。その時、オランダ船は、3年前から長崎港に姿を見せていなかった。フランスがオーストリア、イギリス、オランダに宣

戦を布告し、ヨーロッパは不安定な状態であったりしたからだ。そのような年の10月4日にオランダの三色旗を掲げた船が長崎湾に入ってくる。その船は、イギリス船であった。二人のオランダ商館員は捕まり、飲み水と食料を要求してきた。千人はいると思われていた肥前藩の藩兵は、六、七十名しかいなかった。長崎中が大騒ぎとなる。水と食料を手に入れ、フェートン号は二日後に長崎港を出て行く。長崎奉行松平岡所頭康平は責任を取り自刃をする。作家吉村昭は、フェートン号事件を「三色旗」という小説に表した。『磔』文春文庫1987年に所収)

この英国船フェートン号事件を契機に、幕府は和蘭通事に英語習得の命を下すことになる。翌、文化六年(1809年)、和蘭商館荷倉役としてヤン・コック・ブロンホフが来日する。彼は、イギリスに赴任した経験もあり、日本で最初の英語教師の役を演ずることとなった。このあたりの事情と通詞の覚悟の程は「諸厄利亜語林小荃」と「諸厄利亜語林大成」の冒頭にある凡例の中に書かれている。

文化五年(1808年)のフェートン号事件の起こった前々年と前年には、ロシア艦が千島・樺太、蝦夷北部を襲った事もあり、防衛力に加えて、外国語の問題も大きな課題となっていた。そこで、幕府はロシア語と英語の習得を長崎奉行の曲淵和泉守に命じた。和泉守の指示で、高島四郎兵衛を監督に命じ、文化六年大通詞見習本木庄左衛門以下、6名が英語とロシア語の稽古を始めることとなった。その後8名が加わる。しかし、結局、通詞の中で、英語修行を続けた者は、岩瀬弥十郎、吉雄六次郎、猪俣伝次右衛門の3名のみであった。彼ら三名は、文化七年・八年に相次いで「諸厄利亜語和解」全三冊を完成させた。文化八年九月には、本木庄左衛門が、「諸厄利亜語林小荃」全十冊(三巻)を完成させた。これは、日本で最初の「英語入門書」と言える。そして、三年後の文化十一年六月、日本でアルファベット順に語彙が配列された最初の英和辞典が完成する。作成したのは、本木庄左衛門、榎林栄左衛門、吉雄権之助、馬場為八郎、末永甚左衛門で、「諸厄利亜語林大成」と名付けられたその辞典は、全十五巻四冊仕立てで、奉行所に提出された。英語指南役のヤン・コック・ブロンホフは文化十年(1813年)に帰国する。そして、ドウフ達の待ち望んでいたオランダ船がやってくるのは、9年後の文化十四(1817)年のことであった。交代のためにやってきた商館長はヤン・コック・ブロンホフであった。

『諸厄利亜興学小筈』

語彙数：2,339語

句・文例数：572

対話数：1,431

対話からの例を2つ挙げてみる(英語の上には朱の片仮名で発音が書かれている。)

(1) 我父母と：my father and mother, (メイ ハドル エン モドル)

(2) 兄弟姉妹之問答：Between a brother and a sister (ベドウイン エ ブロドル エ シストル)

『諸厄利亜語林大成』

語彙数：5,910語(二語並列見出し語を含めれば、総語数は6,174語となる)

A之部から冒頭の五つの語を挙げることにする。

(英語の上には朱の片仮名で発音が書かれている)次にオランダ語の同意語が同じく朱で書かれ、最後に日本語訳が書かれている。その意味で、「英蘭和三カ国語辞典」とも言える。ここでは、英単語

と発音と日本語訳を示す。

a エ 冠詞又一 ヒトツ

To abandon ト エバンドン 廢する 放捨

To abase ト エベーズ 賤見 又貶ヲウル

To abate ト エベート 減ヘル

Abbot エブボット 官名

約6,000語が収録され、発音がカタカナで記されていた。初の英和辞典が編纂されたという功績は大きなものがあるが、その発音はオランダ語訛りが強いなど、不十分な点があるのは、ここに挙げた例からでも明らかなことであった。

【最初のネイティブ英語教師と森山栄之助】

時代は弘化四（1847）年に移る。松前藩からローレンス号の船員が長崎に移送される。尋問調書はオランダ通詞本木庄左衛門、楢林鉄之助、森山栄之助によって作られたが、尋問はオランダ商館長ヨセフ・ヘンリー・レフィソンの通訳で行われるという有様であった。ローレンス号の船員たちはオランダ船でアメリカに送り返された。

嘉永元年（1848年）、ラナルド・マクドナルドが利尻島に上陸する。彼もまた、長崎に送られる。マクドナルドに先立ち、捕鯨船ラゴダ号から逃げ出した15名の船乗り達が松前藩から長崎に護送されていた。彼らは、黄蘗宗興福寺境内の資福庵に収容された。ラゴダ号の船員の中には、素行の悪い者もいて、逃亡事件や絞殺事件を起こしたりしていた。一方大悲庵に入れられたマクドナルドは、温厚であった。そのマクドナルドの元に、森山栄之助らの通詞が通い、英語を学ぶこととなる。その時の様子を吉村昭は次のように描いた。

森山は、英和辞書「諸厄利亜語林大成」におさめられた六千近い単語の発音のあやまりをただすことが先決だ、と考えた。その辞書の単語にはかたわらに発音が片仮名で書きそえられているが、マクドナルドについて学ぶようになってから、それらの大半が正しい英語の発音とは別であることを知った。

かれは、「諸厄利亜語林大成」の写本をかかえて大悲庵にゆくと、マクドナルドにみせた。マクドナルドは、眼を大きくひらき、感歎の声をあげた。日本にそのような辞書があることを意外に思っているようだった。

森山が、その辞書におさめられている単語の発音をすべて教えて欲しい、と懇願すると、マクドナルドは快く承諾した。

その日から、森山は、「諸厄利亜語林大成」の単語を一語ずつマクドナルドに発音してもらい、それをかたわらに片仮名で書きとめていった。マクドナルドの発音を何度もくり返して口にし、夜、家にもどってからも、おそくまで発音練習をする。道を歩いている時も、絶えず発音を口にしていた。

森山は、一度おぼえた発音を必ず身につけ、それは他の通詞たちも同じであった。かれらは選ばれた者たちだけに異国語に対する勤がすぐれ、マクドナルドをしばしば驚かせていた。（とはいえ、LとRの発音の区別が日本人には苦手なことはマクドナルドも気づいていた。）（吉村昭『海の祭礼』

新装版2004年文春文庫 pp. 244-245)

ロナルド・マクドナルドの長崎滞在は、嘉永二年（1849年）の4月で終わる。アメリカ船プレブル号でラゴダ号の船員と共に日本を去ることとなった。嘉永七年（1854年）、マシュー・ペリーが二度目の来日をした際に通訳を務めたのは森山栄之助だった。明治という時代を目前に、日本は開国へ向けて大きく舵を取る事となる。

【総合的な学習の時間との関係】

長崎は英学発祥の地と言って良い。フェートン号事件の責任を取った松平因所守康平は、諏訪神社本殿右の石段を登った所にある康平社に祀られている。また、墓は、長崎市鍛冶町の大音寺の境内にある。諏訪神社を下ると、ロナルド・マクドナルドが幽閉されていた大悲庵のあった所に出る。そこには、ロナルド・マクドナルドと森山栄之助を顕彰する碑が並んで建てられている。長崎と英学は、地方の魅力を知るというテーマで中学校・高等学校の生徒の「総合的な学習の時間」や「総合的な探求の時間」で育成する力を養うための格好の材料を提供してくれていることを最後に付け加えておく。グローバル社会に生きるこれからの生徒たちにとって、長崎はすでに江戸時代にこの問題と取り組んでいたことになる。今回、この書評で紹介された問題をよりよく解決するために、生徒達は現場に足を運んだり、様々な資料収集活動を行ったり、色々な人と出会ったりして多くのことを学んでいくことになるだろう。

2. 池田真澄『現場発！人間的な英語の授業を求めて』（287ページ、2019、ISBN978-4-87498-693-6、高文研）

小学校における英語教科化や大学入試（英語）における民間試験の導入の問題等を見てもわかるように、今日、我が国の英語教育は混迷を深めている。そのような状況の下、英語教育に対する否定的意見が拡大再生産され、特に、英語教師の悩みは日増しに大きくなっているのではないだろうか。

本書の前書き（p.2）には、1)「もちろんコミュニケーションも英語による授業も大切なのですが、それらが行きすぎて「わかる」「たのしい」授業の足かせになっていないでしょうか?」、2)「公教育として、本当に子どもたちの英語力をつけ、人格形成に役立つものになっているのでしょうか?」等の素朴な疑問が書かれているが、いずれも英語教育に携わる人のみならず英語教育に興味関心がある人にとっては重要なテーマである。

本書の究極的な目的は、そのような疑問に対する答えを導き出し、混迷する英語教育に対する指針を示すことで、筆者の40年以上の英語教師経験、定年後の英国大学院における応用言語学の研究等をベースに「英語教育のあるべき姿」が多面的に論じられている。全部で6章あり、第1章「一人ひとりの個性を大切に」、第2章「コミュニケーションと文法訳読」、第3章「授業は英語で?」、第4章「日本らしい英語授業とは－外国語と母語」、第5章「英語教育のこれから」、第6章「英語教師はどう成長するか」から構成され、様々な教育実践、学習者の声、文献資料等の中にある有益な情報を教育現場・学習者の視点で纏め上げ、英語教育混迷の先にある「人間的な英語の授業」を描き出している。なお、第1章から第4章は、理論編と実践篇からなっている。

第1章「一人ひとりの個性を大切に」は、第2章以降での議論の基礎と位置付けられ、「人間的な英

語の授業」の実践に必要なものである。前半の理論編では、1) 教師の仕事のやりがい、2) 生徒の個性の大切さ、3) 生徒を知り、名前を覚える大切さ、といった基本中の基本が論じられている。例えば、1) に関しては、「まずは教師が「(外国語で)自分はこれが面白いと思う、だからきっと生徒も面白いと感じるのでは」というものを生徒に投げかけてみるということが教育の原点になるのだと思います」(p.12)と述べられているが、根源的なものに立ち戻ることの重要性が確認されている。後半の実践篇では、1) 自己紹介の工夫、2) 生徒アンケート情報の有用性、3) 教科通信・学級通信・学年通信などの活用、の項目に沿って、教育の原点に立脚した授業を行うためのきっかけ作りの方法が具体的に提示されている。例えば、3) に関しては、生徒の様子がわかる「英語通信」が掲載され、「生徒の個性を捉え、生徒のすべての面を理解することが求められる」(p.26)の重要性が確認されている。

第2章「コミュニケーションと文法訳読」では、近年の外国語教育政策で強調されているコミュニケーション重視の授業の功罪が論じられている。前半の理論編では、1) 学習指導要領とコミュニケーション、2) コミュニケーション力の定義、3) コミュニケーション重視に関する理論的背景、など11の視点からコミュニケーションを過度に重視した授業の弊害が述べられている。筆者は、「もちろん訳読一辺倒だった授業のやり方を変え、コミュニケーション活動を取り入れた授業にすることは大賛成です」(p.35)ということを確認しながらもコミュニケーションを重視するあまり文法指導を軽視するのは問題であるというスタンスでコミュニケーションと文法訳読の問題を考察している。例えば、1) においては、コミュニケーションを重視し過ぎてしまい、「[文法は無視していいから、概要が分かればいい]」、「単語を並べればいい」「授業に積極的に参加する態度が大切だ」というような風潮が出てきました」(p.33)といった見解が示され、それに伴う高校生の英語力低下の問題の所在が明らかにされている。本来は、コミュニケーション能力育成には文法能力は必要不可欠なものであるが、最終的には「文法訳読の良さを維持しつつ、コミュニケーション力もつける、内容のあるバランスのとれた英語教育を目指したいものです」(p.51)という結論を導き出している。後半の実践篇では、そのような英語教育を行うための教材・具体的指導法を1) 発音指導、2) 楽しく、分かり易い文法指導、3) 新英語教育研究会の文法観、など全部で6つの観点から考察している。例えば、3) に関しては、「教材内容に真実性・文化性・生活実感・一貫性があること」(p.68)の重要性が述べられている。

第3章「授業は英語で？」は第2章との関連が深い。前半の理論編では、英語で授業を行うことの諸問題が、主に学習指導要領の方針・記載、教育現場の現状、研究の知見に基づき論じられている。まず、「授業は英語で行うことを基本とする」という学習指導要領の方針そのものに対して否定的な立場で論が展開されているが、それ以上に、その方針の解釈が誤解を生むような方向で教育現場を始め世間一般に広まったことが指摘されている。例えば、「その中(教育委員会の研修会や管理職の指導)で「授業は英語で」という強迫観念を感じる教師が多くなってきている事実があります」(p.87)といった状況が述べられている。次に、「授業は英語で」に対して歴史的考察を加え、関連先行研究の知見をベースに外国語学習における母語使用の有効性が論じられている。そこでは、母語活用の一つとしての翻訳や授業場面に応じた英語と日本語の使い分け(コード・スイッチング)等の重要性を述べながら「英語教育に求められるのは、子どもたちに英語の力をつけることであって、授業を英語で行うことではありません」(p.91)といった結論を導き出している。後半の実践編では、1) 単語の覚え方、2) 語彙指導、3) サイト・トランスレーションと構文解説、などの項目に沿って、コード・スイッチングを意識した授業を行うための方法が具体的に示されている。

第4章「日本らしい英語授業とは－外国語と母語」は、日本の公教育の風土にあった授業の在り方を論じたものである。前半の理論編では、先ず、外国語学習の俗説の例を挙げ（「外国語は、母語と同じように学ぶのが良い」等）、外国語学習には誤解されやすい面があることが述べられている。次に、このような誤解の背景を探るために、1)「母語・第二言語・外国語」、2)「インプット仮説、アウトプット仮説、インタラクション仮説」などの観点から英語学習における本質的な部分を考察している。その考察の柱となるものは、言語的距離、学習者の言語環境、動機付け、教材などの諸要素で、「特に、(1)言語的距離と(2)ESLとEFLの違いは、教育・学習方法にかなり違いを生むと思われます」（p.126）というスタンスで英語学習の本質的な部分に迫っている。理論編の最後では、EFLの状況にあり、目的や動機が持ちにくい日本の英語教育が目指すべき方向性として、「(a) 目的そのものを探求する、(b) 動機が持ちやすくなる教材や授業方法を工夫する」（p.138）ことを示し、例えば、「現実生活の中に生きている生徒の心にどれほど届く教材であるかどうか、生徒が自分の生き方と関連づけられるような授業かどうか」（p.140）が重要になってくるという結論を導いている。後半の実践編では、1) 教材選択の重要性、2) 教材としての歌の有用性、3) 授業における協同学習、などの項目に沿って様々なアイデアが掲載され、例えば、2) の歌の活用に関しては、歌のリズムが英語のスピーキングに役に立つことなどが述べられている。

第5章「英語教育のこれから」と第6章「英語教師はどう成長するか」は、本書のまとめた章である。第1章から第4章までの論考を基に、第5章では小学校英語教育の早期化・教科化や大学英語入試における民間試験の導入などの英語教育政策をどのように捉えるか、また、第6章では英語教師の成長に必要なもの何か、を中心に論が展開されている。

各章において力説されていることは、英語教育の現状やそれに付随する情報を「人間的な英語の授業」というコンテキストで正しく理解することである。例えば、第5章では、学習指導要領に対する明確な位置づけがなされ、「人間的な英語の授業」のベースになっているのは多様性に対応できる環境であるが、「拘束力が強い学習指導要領はこれに逆行しています」（p.204）という見解が述べられている。同様に、小学校英語教育導入に関しても明確な考えが述べられ、韓国で小学校英語教育が上手く行かなかったことを指摘し、ESL環境とEFL環境の違いを踏まえて英語教育を行わなければ学習成果が上がらず、「日本の外国語教育を全体的に考えると、むしろ中学校に予算とエネルギーを集中させた方がはるかに良い結果になるでしょう」（p.209）という見解を述べている。一方、第6章では、例えば、「先生に望むこと」に関するアンケートの結果が示され、「生徒の立場になって授業を組み立てる人間性」や「英語についての専門的力量とその内容を伝えるための創意工夫」（p.233）が求められているが、それらが「人間的な英語の授業」の基本となることが強調されている。また、「人間的な英語の授業」を実践し続けるためには、教師自身が自主的に学び続ける必要があることが力説されている。

近年、英語教育に対する社会的関心が高まっているが、限られた情報で議論がなされることが多いのではないだろうか。本書は、学習者の立場で英語教育に関する文献情報や教育実践例が整理されたもので、「人間的な英語の授業」に向かって一つのストーリーが出来上がっている。特に、「人間的」という言葉は重要で、悩める英語教師に夢と希望、そして自信を与える一冊となるであろう。

先に述べたように「人間的な英語の授業」を行うためには、例えば、日常生活、異文化、ひいては人類全体に関わるような実に様々なこと学ぶ必要がある。言語としての英語というコンテキストを考えると「異文化」に対する理解は重要なテーマの一つである。本書には異文化情報を扱い「人間的な

英語の授業」に結びつける記述が随所に見られる。「総合的な学習の時間」や「総合的な探求の時間」との接点も十分あり、指導上のヒントを提供するものと思われる。

何れにしても、「人間的な英語の授業」に向かったストーリーを読むと、今までとは違った英語教育観に触れることになるであろう。

3. R. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech, J. Svartvik(著)、池上嘉彦(訳)

『現代英語文法 大学編』 紀伊国屋書店 ISBN: 4-314-00172-0, 初版1977

本書はR. Quirk, S. Greenbaum, G. Leech, J. Svartvikが1973年に著した*A University Grammar of English*の日本語訳で、同じ著者の内からG. Leechを主筆として『現代英語文法 基礎編 (*English Grammar for Today*)』と『現代英語文法 コミュニケーション編 (*A Communicative Grammar of English*)』が共に紀伊国屋書店から出ており、*A Comprehensive Grammar of the English Language*がその集大成となる。現在ほどにコーパス研究が発達していなかった当時としては画期的な書籍群であり、本書は入手しやすさと広範さにおいて優れている。前述の*A Comprehensive Grammar of the English Language*やR. Huddlestonによる後発の*The Cambridge Grammar of the English Language*はもはや辞典であり、日用的に読むには不適である。

中学校や高等学校の教壇に立つプロの教師として英文法への理解は必須であり、その際に必要とされる文法の知識は生成文法ではなく科学的伝統英文法や学校文法である。科学的伝統英文法の名著として*Essentials of English Grammar*は必読の書であるが、学校文法の手引書は、英語学が専攻ではない英語教師にとっては高等学校時代の参考書が唯一机上にあるものであり、それは安藤貞夫氏の『基礎と完成 新英文法』か場合によっては『現代英文法講義』、最近採用の教員にとっては石黒昭博氏の『総合英語Forest』かその後継の『Evergreen』であろうか。それらは高等学校の学生が読んで理解することを意図して書かれたものであり、教員として知識を一步先へ導くためにはあと一冊別の書籍が必要であろう。それが本書である。さらに、訳本である本書には、原典よりも多くの参考文献によって追記された、訳者である池上嘉彦氏による巻末の訳者注があり、原典以上の価値があるといえる。

本書の特徴

学習文法書との違い

学習者用の一般的な英文法の参考書は、基本文型・品詞、動詞の文法、修飾語の文法、機能語の文法、話法の変換、仮定法、名詞の文法、その他の順で文法項目が並んでおり、基本的な文法項目の情報量を加減するかその他の文法項目に関する情報量を増やすことで想定する読者の習熟度を分けている。同じ著者であっても前述の『基礎と完成 新英文法』と『現代英文法講義』を比較すると内容の充実度が異なっているのはそのためであるが、『現代英文法講義』を読破し理解すれば、難関大学の英語の二次試験対策には十分である。しかしながら、プロの英語教師に求められる知識は、先に述べた基本的な文法項目の脚注やその他の領域にある知識である。本書と高等学校でも使用されている『Evergreen』を比較すると、内容に以下のような違いがある。

文法項目	本書	Evergreen
基本文型・品詞	第2章 文法の要素 第7章 単文 第11章 複文	序章 文の成り立ち 第1章 文の種類 第2章 動詞と文型 第13章 疑問文と否定文 第14章 否定 その他 句と説
動詞の文法	第3章 動詞と動詞句 第12章 動詞とその補足	第3章 動詞と時制 第4章 完了形 第5章 助動詞 第6章 態 第7章 不定詞 第8章 動名詞 第9章 分詞 その他 動詞の一致、準動詞とは
名詞の文法	第4章 名詞・代名詞・および基本的名詞句	第16章 名詞構文・無生物主語 第18章 名詞 第19章 冠詞 その他 限定詞とは
修飾語の文法	第5章 形容詞と副詞 第13章 複合名詞句	第10章 比較 第11章 関係詞 第21章 形容詞 第22章 副詞
機能語の文法	第6章 前置詞と前置詞句 第8章 付加詞、分立詞、共立詞	第23章 前置詞 第24章 接続詞
話法の変換	第11章 11.52	第15章 話法
仮定法	第3章 3.46	第12章 仮定法
その他	第1章 英語の異種	なし
	第9章 倒置と同格	第17章 強調、倒置、挿入、省略、強調 その他 英語の情報構造
	第14章 焦点・主題、強調	
付録	語形成 強勢、リズム、音調 句読法	なし

本書と『Evergreen』は書籍としてのページ数は同等であり、本書が単章で記述する内容を『Evergreen』は細かく分けて記述しているが、『Evergreen』が記述していない情報に関しては本書の方が詳しい。『Evergreen』は高等学校から大学入学直後の学生に向けた英文法の参考書で、本書はその熟達が終わった実務家向けに書かれているといえる。特に機能語や接続詞の文法である単文と複文の記述が豊かである。本書は各文法項目に関する豊かな例文を求める指導者と研究者にとって重要な文法書で、その意味では、本書はデンマークの文法学者が著した前述の *Essentials of English Grammar* へのイギリスからの返答と言えるかもしれない。

理論言語学の影響

学校文法と聞けば伝統的科学的英文法からの派生と思う研究者もいるはずだが、本書の原典は1973年に発行されているので、参考文献には構造主義言語学者に限らず N. Chomsky などの理論言語学者も含まれており、これまでの伝統的な術語の他に構造主義言語学や生成文法の用語が含まれている。いく

つか例を上げれば、名詞類の直前に置かれて名詞類の指示を限定する語類は、形容詞の限定修飾用法とは働きが異なるため、生成文法の句構造規則にある決定詞 (determiner) という語が使われている。また、

I met him on the bus.

の on the bus は、学校文法では機能的に場所を表す副詞句と解説するが、本書では生成文法のように形式的に前置詞句とも機能的に付加詞とも呼称している。O. Jespersen も付加詞という用語は用いたが、三階位説の用語であり本書のものとは並行しない。

学習用文法書にありがちなのは、統語面の不整合性の説明を、意味的基準や語用的基準に求めることである。本書も含め学校文法の解説書は、英文の適格性の解説よりも適格な文の理解と解釈を重要とする。本書の記述する英文法は例えば、下記の

I met him on the bus.

I saw him on the bus.

に共通する付加詞 on the bus は機能が異なる。一文目では「私が彼と会った」場所であり、二文目では「彼がいた」場所である。形式的には並行する付加詞ではあるが解釈は異なる。このような形で形式と解釈の不並行性について記述するのは、*Essentials of English Grammar* のようで興味深い。

本書の上記の記述は、生成文法学者であればそれぞれの内部構造が異なると理解する。

[I [met him [on the bus]]].

[I [saw [him [on the bus]]]].

このように、参考文献にあるところの理論言語学の知識があれば本書を別の角度から理解することができる。このことは前述の *Essentials of English Grammar* の当時の分析が優れていたことを後発の理論によって再発見することとは異なり、学校文法が次世代に進化したことの表れである。

本書の文法

単文の構造記述を行う際、SVOC の基本文型に加えて義務的副詞類 A が含まれる文法は、高等学校でも授業で触れられることがあろうが、本書では S と A に S_{affected} や A_{place} のような修飾記号が付加されており、Jackendoff の概念意味論や Filmore の格文法の影響をうかがわせる。動詞にも自動詞や他動詞を表す修飾記号が付加されるが、本書に独特なのは主格補語を必要とする動詞を内包動詞、それ以外を外延動詞と定義していることである。内包動詞とは動詞が補語を内包して述語として成立するという意味での用語と思われるが、本書と同じ作者の著作以外にこの用語が用いられている例はなく、独自の研究である。

本書の最大の特徴は、接続詞 (Conjunction) の定義を詳しくし、学校文法では接続詞句または群接続詞などと呼ばれる、またはその分類から外れている語類を付加詞のセクションで扱い、順接機能を

持つのであれば共立詞 (Conjunct)、逆接または譲歩の機能を持つのであれば分立詞 (Disjunct) と定義して、それらにより文と文を接続する文法を示しつつ、それ以降のセクション、特に第10章「文の連結」において、それらの語を利用して接続されるパッセージも例文として研究していることである。パッセージ例文は一部ではあるが、機能英文法の側面も持った解説であると言える。

おわりに

本書が著された1970年代は、軍用弾道計算コンピュータであっても現代のスマートフォンより計算能力とストレージ能力が劣る時代で、そのため現在のように大量のコーパスに支えられた広範囲で文献学的な研究は不可能であった。そのため、時代が進んでコーパス言語学が一学問となり、コーパス利用が主要な研究に含まれるようになると、本書が参考文献に含んでいる研究者、R. Huddlestonにより本書の文法の方向性を受け継ぐ形で *The Cambridge Grammar of the English Language* が著され、本書は古典となった。

4. 上山恭男著『機能・視点から考える英語のからくり』

開拓社 ISBN978-4-7589-2563-1

本書は、英語の基本的な知識を前提に、日本語との比較においてみられる英語の特徴を機能主義言語学の枠組みを用いて解説したものです。筆者は、東北大学で英語学を学んだ後、ハーバード大学での研究員を経て、現在北海道教育大学で教鞭をとられており、英語学の専門家であるのみならず、英語教育においても英語教育の分野でも多数の論文を発表されており、本書でも英語学の成果を英語教育にどのように活かすかについて、興味深い考察をされています。

本書の内容

本書で用いられている機能主義言語学とは、言語形式が「示す」意味をもとに、言語の構造を記述する立場であり、生成文法のような形式に重点を置くものと対立する立場であるといえます。ただし、「機能」に関して研究者の中で共通する定義があるわけではなく、何を「機能」するかについては、研究者によって異なりますが、核となる考え方は、言語形式がどのような意味を持つかという従来の意味論的な視点と、言語形式が実際のコミュニケーションの中でどのように使われるかという語用論的な視点を合わせた形で、特定の意味を持つ言語形式が、実際のコミュニケーションで使われた際に、その言語形式がどのような意味を聞き手に伝える機能を担うか、という観点から言語形式を分析する立場である、とすることができます。

例えば、代名詞は意味論的には、先行する名詞(句)の内容を指します。したがって、”John went to Paris with his sister.” の”his” は先行する ”John” を指します。” John’s sister and he went to Paris.” の “he” は”John” となるのでしょうか。また、”John loved his wife.” とは言えても、”Mary’s husband loved his wife.” と言えないのは何故でしょうか。答えは、”John’s sister and he went to Paris.” の “he” は”John” ではありませんし、”Mary’s husband loved his wife.” は「共感度関係に論理的矛盾があるため」に非文になります。文中に先行する名詞があるにもかかわらず、なぜこのような使い方はできないのでしょうか。具体的な細かい解説は、著者の記述に譲りますが、本書の機能主義言語学的見地では、ここには代名詞が話し手の「視点 (viewpoint)」や「共感度 (empathy)」を表わす機能があるためと考えられています。

す。つまり、どの視点から言語化するか（話し手と言語化の対象となる事態の位置関係をどのようにとるか）により、代名詞の使い方に制約があり、それは、従来の意味論的議論ではなく、テキストレベルで言語形式に「話し手の視点を示す」という機能を担わせることで初めて説明が可能になります。

このような代名詞の使用原理のほか、本書では語順を情報構造の観点から分析した上で、関係節や受動文、存在文がなぜあのような形をしているのかについて、分析・考察し、さらには日英語の対照的考察の中で、「あなた」と"you"の違いや「それ」と"it"の違いについても詳しく論じており、文法現象だけではなく単語レベルの指示機能が日本語と英語ではどのように異なるかについて、最新の研究成果を踏まえた上で考察されています。

言語学の成果を言語教育にどのように活かすか

筆者自身も本書を執筆する趣旨について、「伝統的な学校文法に不満を感じたという経験のある人たちに…（中略）言語の具体的な使われ方の背後にある仕組みといったものを、日本語と対比しながら分かりやすく解説する」と述べていますが、本書は「英語は〇〇のような特徴のある言語です」「英語と日本語は、〇〇の点で違います」ではなく、「なぜ英語はそのような特徴を持っているのか」「英語と日本語の文法体系が異なるのはなぜか」という「なぜか」に対する一つの解答を示している点で、「読み物」としても、面白く読むことができます。

本書が英語を教えることを仕事にしている人にとって有益であるのは、単に比較、考察を行うだけではなく、その結果を教育にどのように活かすか、また教育のなかでどのような点に配慮し教えると良いかを提言している点が挙げられます。

機能主義言語学の枠組みにより、ある一つの形式を用いることが、文字通りの意味だけでなく、実際の受け手（聞き手や読み手）にどのような意味として伝わるのかを明らかにすることは、読者にその言語形式の使い方を理解することを可能にします。従来の文法書や文法理論は、語順の背後にどのような構造が想定されるかについて、詳細に分析を行ってきました。しかし、その分析は、理解しても、当該の言語を理解する、使えるようになる、という実用面には結び付きにくく、言語研究者のための分析となってしまうことが往々にしてありました。しかし、ある言語現象がより現実のテキスト（小説やコミュニケーション等）で、実際の受け手（聞き手や読み手）にどのような意味として伝わるのか、またそのやり取りの中で言語がどのような機能を果たしているのかを明らかにしようとする機能主義言語学のアプローチは、より人間の言語使用を正確に記述することを目指したものであり、目標となる言語を習得する過程においては、有益な知見が多くあります。

筆者自身も指摘していることですが、英語を使えるようになるには、英語という言語が持つ構造や従うべきルール（文法）を理解する必要があります。昨今、知識よりも運用能力を重視する教育が「流行」していますが、運用能力は、話したり聞いたりするだけでは身につけません。ある程度話したり聞いたりした後で、「英語という言語の背後で巧みに仕組まれた原理」（「はじめに」より）をいかに理解するか、もしくは、知識を身につけた上で、話したり聞いたりしながら、その知識を確認するという作業が必要になります。本書はそのような「整理し、理解する」という作業を行う上で、もしくは英語という言語がもつ原理を理解する上で参考になる知見が多く紹介されており、英語学者、言語学のみならず、英語教育の専門家、もしくは英語学習者にとっても有益な本であるといえます。

「視点」という用語からも、機能主義言語学は認知言語学と言語の分析における考え方が近いといえ

ますが、認知言語学が文レベルの言語現象において、形式と意味にどのような有機的関係があるかを記述するのに対して、機能主義言語学はテキストレベルで見た時に、言語現象がどのような意味として機能しているか、言語現象がテキスト形成、もしくはコンテキスト化においてどのような機能を果たしているかを記述するものであるといえます。

5. 中谷素之・伊藤崇達 編著 『ピア・ラーニングー学びあいの心理学ー』

金子書房 2013年 ISBN:978-4-7608-3256-9

近年、新たな時代に求められる学力に対する関心が高まっている。中央教育審議会（2016）は、新たな時代に対応する「生きる力」を育成するための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取り組みの重要性を指摘している。このような状況を受けて、学校教育においては、授業改善のキーワードとして、「学びあい」が注目されている（例えば、杉江, 2013）。

このような現状を受けて、本書では、「ピア・ラーニング」に着目している。ピア・ラーニングとは、クラスメイトや友人とともに学ぶことを重視し、他者のリソースを最大限に活かして学ぼうとすることが特徴である、と著者は指摘している。そして、本書では、このような特徴を有するピア・ラーニングを学校教育で活用するために関連した知見について、次のような構成で紹介している。

序章 ピア・ラーニングとは

第1部 ピア・ラーニングを構成する諸理論

- 1章 必要な援助を求める
- 2章 人と比べ合って学ぶ
- 3章 ピアとかかわる動機づけ
- 4章 何をめざして学ぶか
- 5章 ピアとともに学ぶ
- 6章 「一人で読む」を超えて
- 7章 子どもはピアに援助をどう求めるか

第2部 ピア・ラーニングを促進する過程

- 8章 協同による問題解決過程
- 9章 ピアを介した概念変化のプロセス
- 10章 メタ認知におけるピアの役割

第3部 ピア・ラーニングの展開

- 11章 協同による教育実践の創造
- 12章 日本語教育におけるピア・ラーニング
- 13章 発達に凸凹のある子どもの協同

終章 豊かな学び合いに向けて

以下、各部の概要について紹介する。

序章では、ピア・ラーニングについて概説した上で、仲間とのかかわりや支え合いを通じたものでしか学習、身につけられないものは何かを考えることが重要であると指摘している。そして、ピア・ラーニングの成立を促すアプローチや心理学的メカニズムを紹介している。

第1部では、ピア・ラーニングを理解するために必要な諸理論について紹介している。各章の概要については次の通りである。1章では、学習場面での困難に直面した際に、友人や教師などの他者に援助を求める学習行動である、学業的援助要請に着目している。そして、学業的援助要請は、「つまづきに気づく」、「援助要請に関する意思決定」、「援助要請の実行」のプロセスがあり、「自律的援助要請を促進する」ことが重要であると指摘している。2章では、自分と他者を比較する社会的比較に着目しており、その学習効果について自己向上の動機づけが高まる、他者をモデリングし自身の誤った認知や方略の修正に寄与する、ことを紹介している。3章では、友人とかかわる動機づけに着目しており、親密な友人関係を形成する上で自律的な動機づけが重要であり、この動機づけは学習活動を阻害することではなく、むしろ友人との学習活動を促す働きがあるとしている。また、社会的効力感の重要性についても述べられている。4章では、学習をする上では、何を目指して学ぶかという目標をもつことが重要であり、この目標は学習面だけではなく、対人面や社会面での目標もピア・ラーニングには重要な役割を担っていると説明している。5章では、自ら学ぶ力に関連している自己調整学習に着目している。自己調整学習の成立を支える一要因として、対人関係は重要な環境要因であり個人要因や行動とも相互に関連していると述べられている。6章では、読解という場面に着目し、友人とともに読むことで読解が促進されるが、この効果を引き出すためには指導方法の構造化が求められると指摘している。7章では、人に相談するという援助要請行動と被援助志向性の観点からピア・ラーニングについて検討が行われている。具体的には、被援助志向性を高めるためには良好な学級環境が必要であり、そのような学級でピアサポートプログラムなどを実施することが、ピア・ラーニングを支える一要因になりうると説明している。

以上のように、第1部ではピア・ラーニングを支える諸理論が紹介されており、これらの共通点の一つとして、まずは良好な友人関係（人間関係）を形成することが重要であると指摘できるだろう。

第2部では、ピア・ラーニングが実際の教科学習でどのように実践されているのかに重点が置かれた内容になっている。8章では、協同による問題解決について、9章では、既存の知識体系の大規模な再構造化である概念変化について、10章では、メタ認知とピア・ラーニングとの関連性について、それぞれ焦点が当てられ論じられている。なお、第2部では数学や国語（意見文）といったように、具体的な教科における実践例をもとに論じられている。それらの詳細については、本書を参照することをお勧めしたい。

第3部では、ピア・ラーニングが実際の教育現場でどのように展開されているかについて紹介されている。11章では、ピア・ラーニングを授業に導入しようとする際に、どのような指導を行えばいいのかなど教師が実践を行う上での留意点について述べられている。具体的には、ピア・ラーニングを効果的に進める上で、主体的な学び、学習集団づくりなど、授業に関する認識の転換が求められるとともに、グループワークなどすればいいのではなく、個人と集団の思考を促すための配慮が必要であると指摘している。12章では、日本語教育におけるピア・ラーニングの効果について報告している。13章では、発達に遅れがある子どもがピア・ラーニングに参加する際の留意点が述べられており、特

に、ソーシャルスキルや協同・協働スキルの指導、互恵的相互依存を活用するための配慮等が求められると指摘している。

以上のように、第3部では、近年の教育現場の実態を考慮した上で、ピア・ラーニングを実施する際の留意点などが紹介されている。

終章では、今後のピア・ラーニングの展望について論じられている。その中で、ピア・ラーニングを実施する上で、教師が重要な役割を担っていること、その具体的な役割についても紹介されている。

上述したように、近年、学校現場では生きる力の育成を目的とした教育活動の一つとして、学び合いが注目されている。本書では、より効果的な学び合いを実現するためには、単にグループ活動などを実施すればいいのではなく、様々な留意点があることを心理学の諸理論に基づき紹介している。さらに、そのような実践を展開する教師は重要な役割を担っていることも指摘している。本稿では紹介できなかったが、本書の各章ではピア・ラーニングを理解し実施する上で有益な研究知見なども多数紹介されている。教師を目指している学生のみならず、現在、すでに教師として授業を担当されている方にとっても示唆に富んだ内容となっているため、一読することをお勧めしたい。

引用文献

中央教育審議会 2016 幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)

〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm〉 (2019年9月9日)

杉江修治 2013 協同による教育実践の創造 中谷素之・伊藤崇達(編著) ピア・ラーニング—学び合いの心理学—, 金子書房, 173-186.

6. 片岡義男・鴻巣友季子著『翻訳問答 英語と日本語行ったり来たり』左右社 224ページ 2014年 ISBN-13: 978-4865281002

序

小・中学校に英語教育が取り入れられて以降、英語を使用する能力を持った人はその熟達度に差はあるが増え続けている。普段の生活の中で英語に触れる機会は増え、現在「和訳」をすることは文明開化をした明治時代と比べてそれほど珍しいことではなくなった。しかし、以前に比べ辞書・インターネットといったツールが発達してきたとはいえ、「和訳」することに対し丁寧さや努力が求められなくなっているわけではない。むしろ、今「和訳」をする機会が増えているこの世界で、該当する英文が含有する内容に真摯に相對することがこれまで以上に求められている。実際に翻訳家を目指そうとするだけでなく、現代を生きるすべての人に対し、「英語を使う」ことにはいかに熟慮と情熱が求められることを実感させるものとして、本書は非常に有意義なものである。

本書は片岡義男と鴻巣友季子両者が一章に一冊の小説を扱い「競訳」し、その解釈・翻訳について対話形式で語り合うといったものである。片岡は『階段を駆け上がる』などの作家として知られており、日英ネイティブの小説家である。鴻巣は『嵐が丘』『風と共に去りぬ』など名著の翻訳を多く手が

けており、小説家と翻訳家というバックグラウンドの異なる二人がどのように翻訳をするか、という内容が本書の大きなテーマになっている。

今回、英語教員を志す学生に専門書ではない本書を勧める理由として、以下の4点が挙げられる。

第一に、翻訳作業に取り組み自身の英語力を見つめなおしてもらいたい。

これまで学生が高等学校までの教育で主に扱われてきたのは、英語の翻訳ではなく「和訳」といえるだろう。前後のつながりを意識し、言葉に書かれていないいわゆる行間を読むという機会はほとんどなかったものと推定される。実際、数種類の英語教材を見比べてみても「以下の文章を和訳せよ」といった指示がほとんどで、前後を考慮しながら翻訳が求められるというものはない。

このような状況だからこそ、大学生は翻訳作業に取り組み、英語力がどこまで通用するか、身をもって体験してもらう必要があると考える。しかし、学生が翻訳するテキストを自身で選定し、どの箇所の翻訳に挑戦するかを決定することは困難である。そこで、『翻訳問答』の出番である。

本書で翻訳する作品として、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』、レイモンド・チャンドラーの『長いお別れ』、J・D・サリンジャーの『バナナ魚日和』、J・M・モンゴメリーの『赤毛のアン』、トルーマン・カポーティの『冷血』、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』、エドガー・アラン・ポーの『アッシャー家の崩壊』、といった古典的名著が揃えられている。傑作ぞろいの作品の中でも、指定された範囲は見開き1ページ程度であり、読者である学生が挑戦してみるにもちょうどよい分量であると言えるだろう。

翻訳は訳者によって違いがあるものであり、正解が一つということはない。翻訳作業では、自分の持っている単語・語彙力の中から言葉を選定することが要求される。英語や日本語、異なる言語間のコミュニケーションにおいて、おおよその訳をすることはできても、100%同じ訳を生み出すことは不可能と言っている。翻訳家でも唸るような混沌とした文章に出会ったとき、「こんがらがった」ことも表さなければならないのが、翻訳の難しさである、と片岡も述べている。(p74)

本書の中では、片岡・鴻巣両氏が翻訳の難しさについて度々語っている。翻訳の専門家であり、実績のある二人でも、これほどまでに言葉選びと筆運びに苦悩するのだと学生は本書を通して感じる事ができるであろう。そうすれば、訳文を見て学習した気になる学生が減り、「自分であればどう訳すか」を考えながら自律的に学修できるようになるのではないか。

このように、翻訳をする中で、普段読んでいた小説のような言葉が出てこないとか、きれいな訳が浮かばないとか、そういった「産みの苦しみ」にもがくことによってこそ、自身の英語力の弱みを発見し、あるいは自信をつけることができるのである。片岡・鴻巣両氏の翻訳は洗練された文章となっているが、そのレベルを目指し、葛藤するプロセスこそが学生にとって必要なものなのである。盛んに「伝える英語」の必要性が叫ばれ、コミュニケーション重視の授業が求められている中、あえて本書で内と向き合う翻訳という作業にどっぷりと浸かってもらいたい。

第二に文学作品に触れることがあげられる。

高度情報通信社会である現代では、学生が日常生活で触れる英語の文章はニュース、動画、映画からのものがほとんどであろう。自身の中学校・高等学校の頃を思い返してみても、アメリカ文学・イギリス文学の古典に触れる機会はそう多くはなかった。ましてや、前後の文章を読み解き、一つの単語についてその解釈を周囲と語り合うなんてことは大学時代まで皆無であったといってもいいかもしれない。

先述したように、本書で扱われている作品はどれも名著であり、未読の学生にとっても、是非この機会に読んでもらいたいものばかりである。近年ビジネス英語や使える英語を意識するあまり、学生はニュースや広告などのプレーンな英語の文章を読む機会が多くなっているが、こういった文章の読解練習の反復だけでは、英語に興味を持っていない学生が多くあっても不思議ではない。我々がチラシや案内放送を日本語で永延と聞き続けていても、そこに日本語の深みや面白さを感じることができないのと同様である。そこで、文学作品の出番なのである。

本書は対談形式で進行するため、文章に苦手意識のある学生であっても読みやすいものとなっている。むしろ、英語が苦手である学生にこそ本書を読んでもらい、英米文学作品の素晴らしさを感じてもらいたいと考える。文学を媒介することにより、「原書（英語）で読んでみたい」「いつか読めるようになりたい」という英語学習への内的動機付けが可能になるのではないか。

今教育を受けている学生達が、いつの日か英語を流暢に話すようになり、英語圏のネイティブスピーカーと話すようになったとしても、最終的に問われるのは何を話すかという点である。ビジネス英語だけを目指して特訓しては、英語圏文化に対する理解は深まらず彼らの素養を身に着けることはかなわないだろう。「昼食に何を食べた?」「ハンバーガーを食べたよ」という会話だけでは、真の人間交流はできないのである。どれほど日本語運用能力のある日本語学習者と会っても、ドラえもんも芥川龍之介も知らないとなると、我々も拍子抜けしてしまうだろう。

英語学習者として、彼らを真に理解するためには、英語を話す力だけでなく、彼らのバックグラウンドの一部である文学の素養が求められる。そういった意味で、文学作品の読解は避けては通れないものと言えるだろう。学生である間に、伝統的で重厚感ある作品を自分の表現で訳すという経験は、将来の糧となるに違いない。

自主学習として一人で作品を読み込むのも勿論良いのだが、小さいグループでも構わないので、読書会のような形で翻訳しあい解釈を話し合うことができるのであればなおのこと好ましい。特に文学というのは、他者とその解釈を話すことで、新たな視点の発見や相乗効果で理解が深まっていくものだからである。本書でも、片岡・鴻巣両氏がそれぞれに訳しあい、その解釈を熱くぶつけ合っている。同じ文章を読んでいても、小説家である片岡氏と翻訳家の鴻巣氏が受ける印象は異なり、その言葉選びにも差がある。文学を文学たらしめる文体の差異に着目し、改めて文学作品の多様性と美しさ、英語と日本語の奥深さというものを感じてもらえればと思う。

第三に、日本語力の鍛錬があげられる。

本書の中で、鴻巣は翻訳作業と自身の日本語力について、以下のように述べている。「私は翻訳をやっていなかったらこんなに自分の日本語の語彙は増えなかったと思います。翻訳においては、自分では一生使わない日本語をたくさん使います。訳していると、原文が触媒となって自然と出てきて、不気味に感じるほどです。自分自身の日本語表現も鍛えられます。翻訳者は黒衣だという説が日本では長らく信じられてきましたが、最近では翻訳における創造性、操作性が意識されています。」(pp109-110) ここで鴻巣氏は翻訳作業をする際、原書の表現に引っ張られることにより、自らは使用しない言葉が自分の中から生み出されていくとしている。

しかし、言葉が生み出されるというのは自分自身からだけでは限らない。原書の文章と相対する際、表現が浮かばず辞書や他の作品での表現方法を一つずつ探していくうちに、思いつかなかった日本語表現に出会うといったことは、辞書を使用したことのある誰もが経験あることではないだろうか。SNS

の発展など、複雑な要因が絡まって日本語能力の低下が叫ばれている中、翻訳という作業は英語だけでなく日本語力のブラッシュアップにも一役買ってくれるであろう。

言語の特徴として、英語は動作主体で、日本語は状態を表すことを好むということは周知のとおりである。しかし、本書で論じられる「である」「だ」「だった」等の日本語の状態表現についての分析というのは、時間の都合上高等学校国語の授業でも深く行うのは難しい。しかし翻訳という作業は、どの表現を用いるか、どの程度断定させるのか、すべて自身で選択しそれを蓄積することの繰り返しである。日本語力と英語運用能力両方が要求される現代だからこそ、日本語と英語同時に向き合ってもらような授業が必要なのではないだろうか。

翻訳を用いた授業は、英語力が既にある学生向けではないかと敷居が高く感じるかもしれない。しかし、実は生徒の英語レベルに合わせて作品によって調節することが可能であるし、読解レベルに応じて指導に強弱をつければ、どの学年の学生に対しても指導が可能である。たとえば、“I am a cat.”という一文に対し、中学生は「私は猫です」というように訳をするかもしれない。しかし、『吾輩は猫である』を読んだことのある学生にとっては、「吾輩は猫である」という翻訳が適切だと感じるのではないだろうか。このように、知識や作品の背景を理解することにより、段階的に翻訳の質を高められるという点で、レベルに差がある学生に対しても効果的に活用ができるということなのである。

本書内で扱う作品のうち、特にJ・D・サリンジャーの『バナナ魚日和』は時間軸に沿って物語が進み、イメージがしやすい。文法上の難しい点はあまりないが、作中のgirlは「若い女」なのか「娘」なのか「彼女」なのかという判断や、細部に多少の気配りが求められるという適度な難易度になっている。そのため、対象が中・高等学校の学生であったとしても、実際に訳をさせ表現についてディスカッションしてもらおうという授業も十分に成立すると考えられる。教育実習を経て教壇に立とうとする学生に対しても、本書は授業計画の立案の一助となるのではないだろうか。

結論

以上三点に加えて、本書の「おわりに」には、両氏が考える日本語英語教育の問題点が述べられ、基本動詞 (have, get など) の抽象的な意味を一度に指導することが提言されている。抽象的な概念を持つある単語を個別に教えていくのではなく、一度にチャンク方式で教えなければ、完全に理解することが難しいということである。(p194) それが適切か否かについて今回は論じないこととしても、本書を翻訳しながら読了した学生にとっては、自身の英語力の弱みに気づくと同時に、日本の英語教育に何が不足しているのか身をもって実感するに違いない。

本書は好評につき『翻訳問答2』として続編が発刊されている。片岡×鴻巣で6作共訳した今回とは異なり、次作では鴻巣と奥泉光、円城塔、角田光代、水村美苗、星野智幸が一作ずつ翻訳しようという構成をとっている。また、扱う作品も名作『嵐が丘』に加え、『竹取物語』の英訳を日本語に再び訳すという面白い取り組みも行っている。英語で書かれた作品に限定しないため、本書とは別の新たな発見があることだろう。こちらも併せて推薦したい。

